

研究発表（2）

人間中心主義と自然の内在的価値 ～～概念分析とその応用～～

熊坂 元大（一橋大学大学院社会学研究科特別研究員）

本報告では、応用倫理学において広く用いられてきた人間と自然の関係を巡る二分法—人間中心主義と非人間中心主義，そして道具的価値と内在的価値—を検討する。

生物は自身と種の保存のために、その環境に働きかける。人間もまたその例外ではなく、人類の誕生以来、より快適で安全な住居，より栄養豊富で美味しい食料を獲得するために自然に介入し、利用してきた。環境破壊が深刻な危機であるという認識や動物愛護の精神が広く浸透するにつれ、自然を人間のための道具としてみる人間中心主義への疑問が、哲学・倫理学の立場からのみならず、経済学や歴史学の専門家たちからも投げかけられるようになった。今では、自然は人間の便益のためにのみ存在するのではないという批判に賛同する声は少なくないように思われる。しかし人間中心主義への批判は非人間中心主義の諸学説を生み出してきたが、人間中心主義と非人間中心主義の対立図式そのものが非生産的であるという、新たな批判もまた、倫理学の内外から生じている。

確かに、人間中心主義と非人間中心主義，そしてそれに対応する自然の道具的価値と内在的価値という分類が、社会問題の現実的解決に直接、大きな貢献をする見込みは大きくない。だがこれまでの議論を「非生産的」と切り捨てる前に、過去の議論を精査しておくべきだろう。そのさいに注目したいのが、人間中心主義と内在的価値という二つの概念である。それぞれの対概念が環境保護に熱心な人びとのあいだで詳細に議論・検討されてきた一方で、人間中心主義自体は批判されるべき対象として、そして内在的価値は自明の前提として扱われてきた。だがこの二つの概念は多義的なものであるにも関わらず、専門家のあいだですらその定義に十分気を配ることのないままに、多くの議論が行われてきた。「非生産的」議論の大きな原因の一つは、この点にあるように思われる。

そこで本報告では、この二つの概念の分析を行い、次にその分析を具体的な記述や論争に当てはめることで、人間と自然との関係の解明に取り組む。まず人間中心主義・非人間中心主義という区分には三種あり、そのうちの一つが応用倫理学の議論において重要となっていることを示したい。続いて自然の内在的価値という言葉が、三つの価値概念の混合物であることを明らかにし、その混同からどのような混乱が引き起こされるのかを提示する。そして最後に具体的な環境倫理学や動物倫理学の議論をケース・スタディとして、これまでの分析の応用を通じ、議論をより「生産的」なものとするを試みる。